がく人もみなひらばりにあつまりぬと、一院御らんじて、略下

〔源氏物語二十四胡蝶〕春のうへの御心ざしに、佛に花たてまつらせたまふ、とりてふにさうぞきわけたるわらはべ八人、略中みなみの御まへの山ぎはよりこぎ出て、おまへに出るほど、風吹てかめの櫻すこしうちちりまがふ、いとうらゝかにはれて、霞のまよりたち出たるは、いと哀になまめきて見ゆ、わざとひらばりなどもうつされず、おまへにわたれるらうをがく屋のさまにして、略下

〔仙源抄飛〕ひらばり　平帳、左右樂人樂屋也、幄等同歟、

〔徒然草下〕見物の棧敷うつもよからぬにや、ひらばりうつなどはつねの事なり、棧敷かまふるなどいふべし、

〔類聚名物考調度五〕ひらばり　平張　帟幄

帟製作

神村胤相云、平張の事上に記す如く、大藏式に鋪設の事は見え候へども、內匠式に平張の注文は桁など云物見えず、然ば平張といふは、鋪設の上の名にて、別に幄の外平張と云物有にはあらざる樣に候、江次第等を合考侍るに、幄と大同少異にて、幄は右に記す如く、柱に長短有、長きを中に立、短き柱を檐に立て、屋形をなし、幔を懸たる物と見え候、平張は幄の柱を用ひ設くれども、屋の形をなさず、同じ長さの柱ばかりを用ゐて、庵をなさず、今いはゆる天幕をはると云が如くしたるをいふ類に候、節會雨儀に設けたる事、江次第の中往々所見候、儀注の書廣相考候はゞ、證據もたしかなる說も出來べく候歟、先愚按憶說の方申入候、取捨云々、

帟用法

〔延喜式三十大藏〕五月五日節、立二七丈幄七宇、五丈幄七宇、平張二宇、懸幔、

七月廿五日相撲節、神泉苑立二幄十二宇、平張二條、幕一張、

〔新儀式四〕殿上侍臣賭弓事